

# 第 1 章

## 開発の背景と概要



# 第1章 開発の背景と概要

## 第1節 開発の背景

### 1 地域障害者職業センター等への調査

令和5年度に全国の地域障害者職業センター及び広域障害者職業センター（全50か所※）（以下「地域センター等」という。）を対象に、発達障害者との相談に関するアンケート及びヒアリングを実施しました。

これらの調査で、実際の相談場面で支援者が体験したことについて質問したところ、表1のように発達障害者との相談において、状況や特徴に応じた対応への難しさを感じていることがうかがえました。

※ 50か所の内訳：各都道府県の地域障害者職業センター47センター、東京障害者職業センター多摩支所、国立職業リハビリテーションセンター、及び国立吉備高原職業リハビリテーションセンター。

表1 発達障害者（本人）との相談についての意見

● 本人の話したいことがまとまらず、相談内容のテーマを一つに絞ることが難しい
● 本人の話す内容・話題が拡散し、整理するために時間を要して、限られた時間内に整理やフィードバックすることが難しい
● 本人自身が困っていることを言語化できなかつたり、相談したい内容を整理できていないと面談時間が長引きやすい
● 自己評価と周囲の評価が異なる場合に評価の共有の仕方に苦慮する
● 質問者が意図したことと、本人の回答とにずれが生じる
● 本人の言語表現や言葉等の解釈が一般的な解釈と異なっていることがあり、コミュニケーションのずれが生じやすい
● 認知の特徴を踏まえ、本人の理解できる形で伝えることに難しさを感じる
● 本人が情報を整理・統合することが難しく、体験したことや助言したことがなかなか腑に落ちない
● 本人の興味関心のあるテーマや内容であるか否かで伝わる度合に差が大きい
● 本人と問題意識や課題について共有しにくい
● ストレスや失敗の要因と本人の特徴との紐づけが難しい

## 2 相談場面における発達障害の特徴に応じた対応

発達障害者との相談に支援者が難しさを感じる要因の一つとして、発達障害の特徴は幅広く、人によって表れ方が異なり、より個別性の高い対応が必要であることが挙げられます。

職業センターでは「情報処理過程仮説」に基づいた発達障害者の特徴に着目しています。情報処理過程とは情報を受け取り理解する「受信」、行動を選択する「判断・思考」、実際に行動を行う「送信」といった情報処理の一連の流れを指しますが、個人の経験や考え方等が影響し、同じ出来事であっても人それぞれ処理の仕方が異なります。

さらに、発達障害者は感覚やコミュニケーション・社会性の特徴、不注意、多動性、衝動性の特徴が情報処理過程にも影響を与え、独自の捉え方や表現の仕方となることもあり、そのため、「他者との共通理解が図りにくい」「限られた時間のなかで情報を整理し、検討することが難しい」といった状況が生じやすくなると考えられます。

## 3 支援者の相談スキル向上における課題

発達障害者との相談を難しくしている要因は、発達障害の多様な特徴に応じた対応が必要であることに加えて、支援者の相談スキルの向上にかかる課題も考えられます。

相談スキルは基本的な面接技術の習得と実践を積み重ねることで向上が図られると考えられますが、実践した結果や効果、改善点を振り返り、検証する、そして検証結果をもとに再度実践するといったことが必要です。

一方で、相談場面の多くは個室で発達障害者と支援者の一対一で行われ、支援者が自らの相談場面においてライブスーパーバイズ等を受ける機会に限られ、相談のノウハウは個々の支援者の中で「実践知」として蓄積されてはいても、言語化された「形式知」としては共有がなされにくいといった状況があります。

## 第2節 開発の概要

### 1 本マニュアルのねらい

職業センターでは、地域センター等からの声や支援者の相談スキルの向上に係る課題の解決も視野に入れて相談に焦点を当てた支援マニュアルの作成に着手することにしました。

WSSPでは発達障害者と支援者が「経験を振り返る」「目標を設定し、実行する」「実行した結果を振り返る」という一連の過程を通じて、発達障害者自身の困っていることや改善したいことの解決策を見出し、解決に向けた一歩を踏み出すこと、ストレングスを見出すことを相談の目的としています。

WSSPの受講後のアンケートでは「うまく言葉にできなかったことが相談の中で会話を重ねることにより言葉で表せるようになった」「相談を重ねることで、なぜうまくいかないのだろうかといったことが整理され、自分の特徴について気づきを得られた」といった相談の効果について感想が挙げられています。

本マニュアルは発達障害者との相談の方法について、WSSPの実践を通して得られた経験等をもとに「相談の構造化」「支援ツールの整理」「支援者の相談スキルの振り返り」等についてまとめるとともに本文の要所要所に「相談のコツ!」や「コラム」等を掲載しました。また、職業相談等様々な場面で手軽に活用できるよう「付録」には、発達障害者との相談においてよく遭遇する場面を取り上げ、支援者の対処行動に係る「対応のヒント集」として掲載しました。

### 2 本マニュアルの活用を想定する対象者

本マニュアルは、知的障害を伴わない、主に自閉症スペクトラム障害、もしくは注意欠陥多動性障害のいずれか、または両方の診断を受けている発達障害者（以下「発達障害者」または「本人」という。）との相談場面での活用を想定しています。

## コラム

### 「目標として設定された行動が行われない」

#### その理由は？

相談場面において本人と共通理解を図れたと支援者が感じていても、行動化する段階では支援者が期待する行動に至らない（もしくは期待と異なる行動を行う）場合があります。情報処理過程仮説に沿ってその理由を考えてみます。

#### 受信の段階

- 支援者と本人が互いに使用している言葉の意味が異なっているため、共通認識が図られていなかった
- 本人の注意を阻害する刺激があり、話に集中できていなかった 等

#### 判断・思考の段階

- いつ、誰に、どんな場面で行動するのが判断できなかった
- メモをとっていなかったため、目標として設定した行動を忘れていた
- 不安を強く感じて、実行に移せなかった 等

#### 送信の段階

- どのように行動すれば良いのか具体的な方法が分からなかった
- 実行しようと思っていたが、つい違う行動をとってしまった 等

これらの仮説を検証するためには発達障害者の特徴、これまでの経験、考え方やものごとの捉え方の傾向について、相談場面等を通じて確認した上で、改めて行動に移すための具体的な目標を本人と一緒に検討することが必要です。